

不登校児童生徒の理解と支援について

ーフレンド学級における相手を意識した体験活動を通してー

川崎 和 恵

平成22年度のフレンド学級における調査研究の課題として、新たな集団への適応のためには、自己肯定感の高まりの上に自己表現の力を伸ばしていくことの必要性が挙げられた。また、自己表現の力は、「伝える意欲」と「適切に伝えるスキル」に支えられると考えた。そこで、これらの意欲とスキルを高めるために、適切な自己表現ができる場の設定や工夫をした。その結果、長期にわたり学校に不応適を起こしている児童生徒に、新たな集団への適応に向かう意欲の高まりを感じることができた。そして、この試みは、適応指導教室だけではなく、学校における不登校児童生徒への理解と支援にも生かせるものではないかと考えた。

〈キーワード〉 自己表現、伝える意欲、適切に伝えるスキル、集団への適応

I 主題設定の理由

不登校が長期化した児童生徒が学校復帰に向かっていくためには、不登校のきっかけとなった問題の解決だけでなく、新しく生じてきた学習への不安や対人関係への緊張・不安などを解消することが重要になってくる。

このことを踏まえ、平成22年度におけるフレンド学級では、学習支援をするとともに、より良い人間関係づくりの力を育てることを目指した。特に、より良い人間関係づくりの力を育てるために、共感的な関わりの中で「自分を大切に思える自己受容」と「自分に自信がもてる他者からの受容」の体験を積み重ね、自己肯定感を高める活動を続けてきた。その成果を得て、フレンド学級児童生徒は、自分の本当の気持ちと向き合うことができるようになってきた。しかし、自分の気持ちを他者に伝えることができなければ、より良い人間関係づくりにつながっていかない。つまり、集団適応につながっていかないということが新たな課題として残った。

平成23年度は、他者とのより良い人間関係を築くために、昨年度の実践を継続していくとともに、適切な自己表現の場の設定と工夫を試み、自分の気持ちを他者に伝えられるようにすることが必要であると考えた。年度当初のフレンド学級児童生徒の自己表現に関する実態は、主に次の2点にまとめられた。一つ目は、互いの自己表現に対して受容的な集団となっていること。二つ目は、他者への自己表現に対する自信のなさが顕著であることである。そこで、今年度のフレンド学級では、他者に気持ちを伝えるために必要なことを「伝える意欲」と「適切に伝えるスキル」と二つに分けて捉え、相手を意識した体験活動を意図的に仕組むことで、「伝える意欲」を高め「適切に伝えるスキル」を身に付けさせたいと考えた。

このような取組みが、適応指導教室に在籍する児童生徒に、新たな集団への適応に向かう力を伸ばし、学校においては、不登校傾向にある児童生徒への理解と支援の在り方を示す一助になると考え、この主題を設定した。

II 研究の目的

以下の2点について研究することにより適切な自己表現の力を育て、不登校が長期化している児童生徒に新たな集団へ適応する力を伸ばす。

- ・自分の気持ちを「伝える意欲」を高めるために有効な、相手を意識した体験活動プログラムを探る。

- ・自分の気持ちを相手に「適切に伝えるスキル」を身に付けさせるために有効な、異学年少人数集団の特徴を生かした活動プログラムを探る。

Ⅲ 研究の方法

適切な自己表現について考察する。そして、フレンド学級において「伝える意欲」の喚起につながる相手を意識した体験活動と、「適切に伝えるスキル」習得のための活動プログラムを作成、実践する。その上で、アンケート調査や振り返りカードなどを用いて児童生徒の変容を追跡し、その有効性を評価する。

Ⅳ 研究の内容

1 「適切な自己表現」について

昨年度の調査研究から、不登校が長期化し、自己肯定感が低下している児童生徒にとって、自分の本当の気持ちと向き合うことが、より良い人間関係づくりの第一歩であることが分かった。その上で、その自分の気持ちを他者に伝えること、すなわち、適切な自己表現ができるようになることが、新たな集団への適応に向かう原動力になるのではないかと考えられた。

適切な自己表現とは、他者に自分の気持ちをうまく伝えられるということである。これは、「伝える意欲」と「適切に伝えるスキル」に支えられて伸ばしていけるものとする。

「伝える意欲」をもたせるためには、伝えたいことがなくてはならない。伝えたいことは、心のゆれから生じてくる。心のゆれは、行動や体験によって引き起こされる。しかし、学校に不適応を起こしている児童生徒の多くは、活動の幅がせまい。また、活動はあってもそれを伝えるに値するものと捉えにくいことが多い。そこで、このような児童生徒に対して、共通の体験活動を仕組むことで、伝えたいことを意図的にもたせたい。体験活動を仕組んでいくことで、児童生徒の中に伝えたいことが生まれ、「伝える意欲」が高まり、自己表現をしようとするのではないだろうか。さらに、共通の体験で感じた気持ちを言葉で表現し、共有し合うことができれば、自己肯定感が高まるだけでなく自分と他者との双方向の言葉によるコミュニケーションの意欲を高めることにつながるのではないかと考える。

「適切に伝えるスキル」は、どうであろうか。話す力は、話す場を意図的に設定することによってそのスキルが身に付き、伸ばしていけるのではないかと考える。学校に不適応を起こしている児童生徒の多くは、話し方・聞き方のスキルが高くはない。これは、自分に自信がないことが大きな要因だろうが、もう一つの要因として話したり話し合ったりする経験が非常に不足していることが挙げられるだろう。したがって、自己表現ができる場を意図的にもたせることがスキルの習得に不可欠だと考える。

また、学校に不適応を起こして

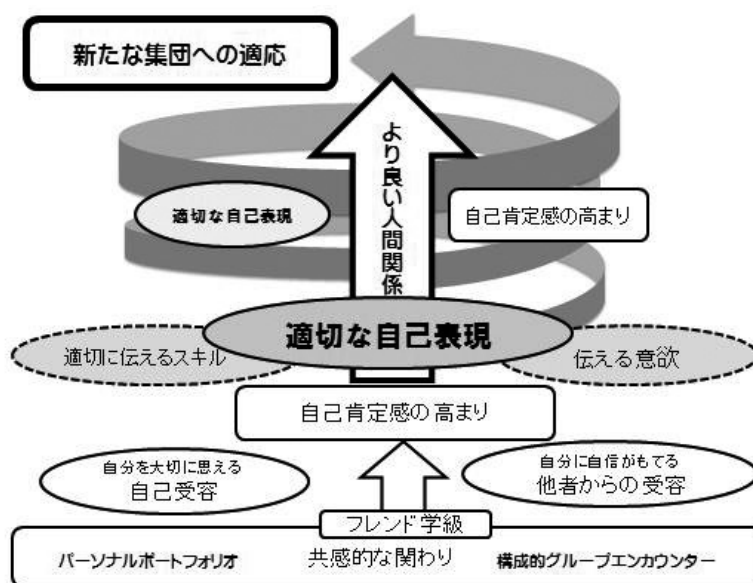


図1 「適切な自己表現」と「集団への適応」

いる児童生徒の中には、経験不足からではなく、その子のもつ特性からコミュニケーションに困り感をもっている子も多い。このような児童生徒にとっては、日常生活の中でトラブルが起こったときがスキルの「学びどき・教えどき」である。生活体験そのものが適切な自己表現の習得の場と捉えることができるだろう。

いずれの場合も、適切な自己表現に必要とされる「適切に伝えるスキル」は、話す体験を積み重ねていくことで伸ばすことができると考える。

なお、本研究では、他者とは、自分ではないすべての人間（間接的にしか関わりのない人間も含めて）を指し、相手とは、目の前にいて直接的に関わることができる人間を指すものとする。そして、フレンド学級の実践においては、相手に限定して取り組む。なぜなら、人間関係に不安感をもっている児童生徒が、他者という自分ではないすべての人間を想定して自己表現するより、目の前にいる相手に向かって自己表現することのほうが抵抗感が少ないと考えたからである。また、自分が直接関わることで相手への自己表現がうまくいったという体験は、自分が周囲になんらかの働きかけをすることでより良い状況に変えることができたという実感をもちやすいとも考えたからである。仮に失敗したとしても、直接関わる相手であれば、修正をすることもより容易である。

これらのことから、より良い人間関係をつくり、新たな集団へ適応していく力は、自己肯定感の高まりの上に、「伝える意欲」と「適切に伝えるためのスキル」に支えられるところの相手を意識した「適切な自己表現」の力を付けていくことで伸びていくものであると考える。また、この適切な自己表現の力が伸びることで自己肯定感がさらに高まり、適切な自己表現ができたことへの自信と次への表現意欲の高まりにつながるのではないかと考える。

2 フレンド学級における具体的な取組みの柱

「適切な自己表現」の考察に基づき、以下の3本の活動の柱を立て、平成23年度のフレンド学級運営の計画を立てた。

(1) 相手を意識した体験活動の計画・実践 →主に「伝える意欲」を高めることを目指す。
(2) 話す体験ができる場の設定 →主に「伝える意欲」を高め、「適切に伝えるスキル」を身に付けることを目指す。
(3) コミュニケーションに困り感をもつ児童生徒への個別支援 →主に「適切に伝えるスキル」を身に付けることを目指す。

(1) 相手を意識した体験活動の計画・実践

フレンド学級では、「ふれあい広場」を設定している。今年度は、この活動内容に相手を意識した体験活動として、A幼稚園訪問とその訪問に向けた表現活動を取り入れた。(表1・表2)

表1 【前期ふれあい広場活動計画（抜粋）】

活動日	活動内容	
6月13日	スマイル工房Ⅰ	A幼稚園訪問に向けて自己表現の練習をする。(1回目)
16日	スマイル工房Ⅱ	A幼稚園訪問に向けて自己表現の練習をする。(2回目)
27日	スマイル工房Ⅲ	A幼稚園訪問に向けて、「お話のプレゼント」の練習をする。
30日	A幼稚園訪問	A幼稚園を訪問し、「お話のプレゼント」と園児との触れ合いを体験する。

表2 【後期ふれあい広場活動計画（抜粋）】

活動日	活動内容	
10月17日	ドレドレミュージック	ハンドベルの楽しさを味わう。
11月7日	スマイル工房①	A幼稚園訪問の計画を立てる。

14日	スマイル工房②	A幼稚園訪問に向けて自分たちで決めた「お話のプレゼント」の練習をする。(1回目)
12月5日	スマイル工房③	A幼稚園訪問に向けて自分たちで決めた「お話のプレゼント」の練習をする。(2回目)
8日	A幼稚園訪問	A幼稚園を訪問し、「お話のプレゼント」と園児との触れ合いを体験する。

(2) 話す体験ができる場の設定

言葉によるコミュニケーションを日常的に取り入れるために、「クラス会議」(森重 2010)の手法を取り入れる。さよならミーティングと関連付けて活動するようにし、フレンド学級児童生徒で話し合う時間を「スマイル会議」と名付けて、適宜話し合いの場がもてるようにした。

(3) コミュニケーションに困り感をもつ児童生徒への個別支援

個人の特性として、コミュニケーションが苦手である児童生徒には、共感的な関わりを基礎に、どのような場面でどのような振る舞いをすると良いのかを体験的に学ぶことができるように支援の方法を工夫した。

3 フレンド学級における実践

(1) 相手を意識した体験活動の計画・実践

① 体験活動を構成するための視点を明確にする。

A幼稚園訪問については、昨年度からの取組みなので、次の2点について改善していくことにした。一つは、フレンド学級児童生徒ができる表現活動を取り入れること。もう一つは、児童生徒自身のアイデアを取り入れることである。これらの改善点を考慮して、視点を次のように定めた。

〈視点ア〉外部講師を招いて専門的な指導をもらうとともにスタッフとの役割分担を図る。

専門性の高い外部講師を招くことは、内容理解の深化や技術向上に効果をもたらす。また、フレンド学級の児童生徒は、必要以上に相手に合わせて行動する傾向がある。そこで、指導は外部講師に任せ、不安感や抵抗感をスタッフが十分に聞くことができる体制にし、児童生徒が強い負担を感じたまま講師に従うことがないようにする。

〈視点イ〉スモールステップで課題設定と成果の確認をさせながら見通しをもたせる。

スモールステップで課題設定をし、今ある力に積み重ねていく手法を取り入れる。そのために、活動内容ごとに振り返り表を作成し、自分の課題への取り組み方を工夫させる。特に、「伝える意欲」を阻害する要因(心配なことなど)に対しては、スタッフがきめ細やかに対応できるように配慮する。これによって児童生徒が見通しをもって意欲的に取り組めるようにする。

〈視点ウ〉できることから活動に参加させる(役割分担に多様性をもたせる)。

ペープサート劇を取り上げることにした。その理由は、劇という形式が、明確なキャラクター表現を通して自分を出しやすい活動であること、役割分担に多様性をもたせることができること、そして、幼稚園児の興味・関心に合った活動だからである。

〈視点エ〉児童生徒が工夫を加える余地を残しておく。

自分たちの活動であることを強く意識付けるために「スマイル会議」という話し合いを通して、表現活動の内容や役割分担を工夫して決める。初めての活動なので、実際の話し合いにはスタッフも参加し、話し合い方のモデルとなる。

② 実践

前期A幼稚園訪問とペープサート劇「三匹のこぶた」

対象 フレンド学級児童生徒 4名 見学者 1名

前期のA幼稚園訪問では〈視点ア〉において、福井県子どもNPOセンター「うめだ演劇工房」の梅田美千代氏を講師に招き、自己表現練習とフレンド学級児童生徒ができる表現活動としてペープサート劇に取り組んだ。

[前期フレンド学級 A幼稚園訪問および訪問に向けた活動のねらい・内容と活動の観察記録]

(スタッフの活動記録より)

活動日	ねらい (○) と主な活動 (・)
6月13日	○スマイル工房Ⅰ 「梅田先生と仲良くなろう」 ・だるだる体操 ・声の出し方 ・自己紹介 ・声色伝言ゲーム
6月16日	○スマイル工房Ⅱ 「自分でできることをさがそう」 ・あいうえお遊び ・イメージをふくらまそう ・「三匹のこぶた」台本の読み合わせ
6月27日	○スマイル工房Ⅲ 「みんなで練習しよう」 ・人形遣いとナレーターなど、全体を合わせる
6月30日	○A幼稚園訪問をしよう ・ペープサート劇 ・園児の活動の手伝いをする

今日は、初めての表現活動に取り組む。思ったより抵抗感がなく楽しんでいた。さよならミーティングで「スマイル会議」を開く。「お話のプレゼント」を何にするか話し合う。B児「台詞がきちんと決まっているので、紙芝居がいい。」A児「声を出さなくていい役割があるので紙芝居がいい。」C児「パス」D児「人形とか動かすと園児が喜んでくれるのでペープサート劇がいい。」など自分の考えを話すことができた。人形作りもすると役割がたくさんあるということを付け加えると、みんな、ペープサート劇をやってみようということになる。

劇の題材についても話し合う。幼稚園の子が分かる内容で、怖がらないような話が良いのではないかと、という意見が出て、「三匹のこぶた」に決まる。

A幼稚園でのペープサートでは、みんな力を合わせて集中して演じることができた。幼稚園児たちは、全員ひとことも発することなく劇に見入っていた。

スマイル工房Ⅰ～Ⅲでは、表現活動に消極的だった児童生徒が、梅田氏のスモールステップによる指導のおかげで、だんだんと表現することの楽しさを感じ取り、生き生きとした表情に変わっていった。声の出し方だけでなく、イメージの膨らませ方や表情の大切さなども学ぶことができた。「三匹のこぶた」の劇へのアドバイスも子どもたちは素直に受け入れ、A幼稚園訪問時には、とても満足のいく発表となった。



A幼稚園訪問発表の様子 (左・中央 前期フレンド学級 右 後期フレンド学級)

後期A幼稚園訪問とハンドベル・ペープサート劇「三匹のこぶた〜クリスマス編〜」

対象 フレンド学級児童生徒 5名 見学者 1名

後期A幼稚園訪問も同じ過程で実施した。〈視点ア〉において、当研究所山下研究員を講師に招いた。また、今回の「お話のプレゼント」はペープサート劇に新しい内容を加えることができるように、事前に山下研究員にハンドベルの体験活動をお願いした。話合いの結果、前期の訪問で発表した「三匹のこぶた」のペープサート劇にハンドベルによるクリスマスソング演奏を加えて、「お話のプレゼント」を「三匹のこぶた〜クリスマス編〜」に決定した。A幼稚園訪問では、園児たちがハンドベル演奏に合わせて歌う場面もあり達成感のある活動となった。

③ 子どもの変容

ケース1

A児 中3女子。不登校期間が5年以上になる。家庭環境が不安定で家族に気を遣っている子である。周囲への気遣いから自分の思いや考えを表現することを苦手になっている。年度当初は、図書室登校をしている。

表3 スマイル工房&A幼稚園へGO! (幼稚園訪問振り返り表 項目のみ一部抜粋)

1. 今の幼稚園へ「行きたい度」はいくつ?
2. 今の「どきどき度」は?
 - ①幼稚園の子といっしょに活動できるかな?
 - ②幼稚園の子が喜ぶことをしてあげられるかな?
 - ③みんなの前で「お話のプレゼント」ができるかな?
 - ④他に何か心配なことはあるかな?
3. 今日の感想を書こう。(発見!自分のこと周りのこと) (10段階評価)

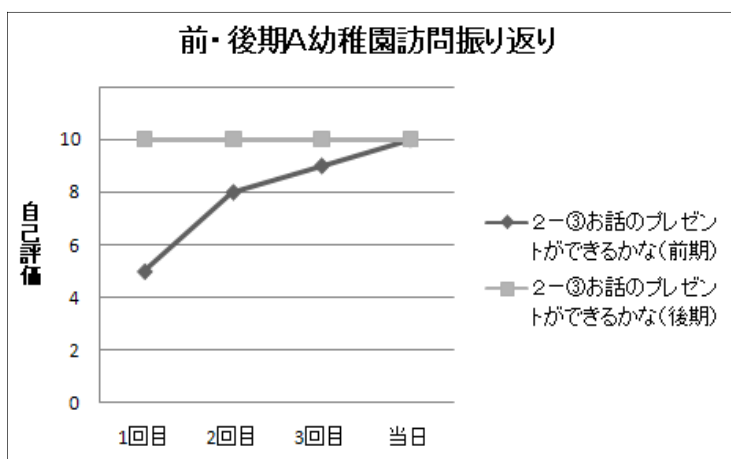


図2 A児の前・後期A幼稚園訪問振り返りから

〈A児の感想から〉

- 6/13 お話するのははずかしいです。子どもちゃんは好きだが、はずかしいことはしたくないです。(話す・動くなど)
- 6/27 (劇を)やってみたら楽しかったです。でも人形を動かすのは、テニスなみに疲れしました。
- 6/30 A幼稚園では、劇が上手くできて良かったです。B児は、結構子どもちゃんに好かれていいなあと思いました。Cちゃんとも協力できてよかったです。

A児は、後期のスマイル工房の活動中に、他の児童生徒から、「〇〇ちゃん、この役やってみたら」と勧められ、本人の最も苦手にしていた台詞のある役に挑戦したり、全体練習中、役割分担がうまくいかないときに、「じゃあ、その役は、うちがするわ」と言ってナレーション役を引き受けたりした。

逆に、自分の役割が手一杯になったときには、友だちからの「その役、私がやってあげる」というアシストに素直に応え、集団で発表を完成させるという目標に向かって協力し合う態度が見られた。

また、本児のスマイルファイルの感想には「2011/12/12 本当にこの1年、自分は成長したなと思いました。中学3年生になっているいろんな不安があるけど、いろいろみんなと話し合っ、難しいことも考えるようになったし、人のことばっかじゃなく自分のことも考えられるようになった」とも書いている。

図2は、表3の幼稚園訪問の振り返り表のうち、「2-③のお話のプレゼントができるかな」の自己評価の点数をグラフ化し、前・後期の評価結果を比較したものである。このグラフと感想からも分かるように、A児は、はじめは、表現活動に対する抵抗感が強かったと思われる。しかし、練習を重ねるごとに自信をつけることができたと考えられる。後期のA幼稚園訪問の感想には「うちは、やればできる。とてもはずかしいけれど、おもしろいのでがんばります」と書かれており、前期の活動に、後期の体験を重ねたことにより表現活動を行うことに自信をもち、次のチャレンジへとつなげることができたと思われる。

A児は、現在（12月末）、図書室登校から相談室登校へステップアップしている。学力診断テストや定期考査、確認テストを受けている。高校進学に向けて、前向きな姿勢を強く感じるようになっていく。

ケース2

B児 中2男子。不登校期間が3年以上になる。周囲への気遣いから集団活動に参加はするものの意思表示や自分のしたいことを見付けることを苦手としている。中1の時に中学校入学式の翌日に1日だけ登校したが、その後は全欠で2年生の4月を迎えている。

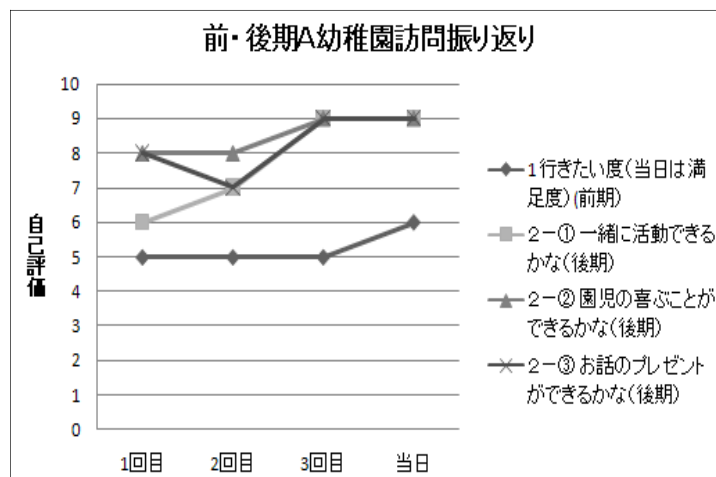


図3 B児の後期A幼稚園訪問振り返りの変化

〈B児の感想から〉

- 11/ 7 まあ、決まったので安心。
- 11/14 A幼稚園のがいろいろといそがしい。
- 12/ 5 A幼稚園の練習は、まあできる。
- 12/ 8 げきがうまくできた。

B児は、前期A幼稚園訪問の振り返り(表3)の自己評価は、当日の満足度が評価6になっているだけで、他の全ての項目に対して、評価5をつけていた。前期スマイル工房の活動は、十分に自信をもった活動ではなかったことが分かる。本児は、後期の活動で初めてハンドベルの演奏を経験した。そのためか、本人のもつ特性からか、一斉に鳴るベルの音に対して不快感を口にしていった。それでもなお、図3から分かるように、後期A幼稚園訪問に対しては、練習を重ねるごとに、全体的に自己評価が高くなっており、自信をもって取り組んだことがうかがえる。また、「まあできる」という感想記述から、短い言葉ではあるが、練習の成果を実感していることがうかがえる。また、本児は、2011年の振り返り(表4)で、「自信度アップ」を自己評価(5段階評価)させたところ、「3. フレンドのみんなと楽しく活動ができる」に評価5を、「8. 自分は周りの人に役立つようになった」に評価4をつけている。集団で活動することの楽しさを味わい、自分の行動が周りにより影響を与えたと感じていると思われる。

表4 [2011年を振り返ってみよう(項目のみ抜粋)]

今年一年間を振り返ってみて、どのくらい自信ができましたか。

1. 幼稚園の子たちを喜ばせることができる。
2. 劇やハンドベルなどの発表ができる。
3. フレンドのみんなと楽しく活動できる。
4. スマイル会議では自分の話したいことが言える。
5. 相手のことを考えて、自分の思いや考えを話すことができる。
6. 自分のことをじっくり考えることができる。
7. 少し、苦手だと思うことにもチャレンジすることができる。
8. 自分は、周りの人に役立つことができるようになった。

(5段階評価)

B児は、10月に学校の玄関まで一度行った。また、現在(12月末)は、自分から学校でテストを受けてみようかと話し始めた。確認テストの練習問題を学校へもらいに行き、フレンド学習会で解いてみた後、学校で試験を受けることを計画している。

④ 活動内容についての考察

2回のA幼稚園訪問は、いずれの活動も非常に充実した活動をすることができた。

A児は、園児を喜ばせるために、自分が積極的にフレンド学級児童生徒(=相手)と関わったことで自己肯定感が高まり、自分の考え方や行動を変えられることができたと考えられる。フレンド学級という小集団で、自分の苦手とすることへのチャレンジ意欲や自分が困ったときに援助を受け入れる態度が育った。相手のことばかり考えるのではなく、自分の気持ちを優先させることができるようになり、新たな集団へ適応する意欲を高めたものと思われる。

B児は、1回目の幼稚園訪問の体験を経て、2回目の幼稚園訪問に向けて、園児(=相手)に対して「伝える意欲」が高まり、発表が成功したことにより、達成感を味わうことができた。そして、周囲の人と楽しく活動したり自分の意見を伝えたりすることに自信をもつことができたのではないかとと思われる。

この活動では、幼稚園児(=相手)に、ペープサート劇やハンドベルの演奏(=伝えること)を意図的に仕組んだことで、児童生徒の中に園児に喜んでもらおう、楽しんでもらおうという気持ち(=伝える意欲)が高まり、劇や演奏という表現活動(=形を借りた自己表現)ができた。その結果、自信やチャレンジする意欲が高まったと考えられる。

(2) 話す体験ができる場の設定

スマイル会議

対象 フレンド学級児童生徒 5名 見学者 1名

① 話す体験ができる場の設定の視点を明確にする。

フレンド学級を異学年少人数集団と捉え、話す体験ができる場を設定する。話すことや話合いを通して言葉によるコミュニケーションの量を確保する。その話合いのもち方の視点を次のように定めた。

〈視点ア〉とにかく話してみよう。さよならミーティングで自分の思いを話す。

さよならミーティングの場を継続的に利用し、話すことや聞くことに慣れていくようにする。さよならミーティングを利用するのは、一日の活動を終えた後で心動かされた体験があること、フレンドタイムの直後で、心も体もほぐされ自己開示がしやすい雰囲気になっていることからある。

〈視点イ〉話してもOK、話さなくてもOK。話したくないときはパスをする。

この活動は、継続的に行うことを目的としているので、話したいときに話す、話したくないときにはパスをしてもよいことにする。どうしても話せない子への心理的な負担を軽減するためである。

〈視点ウ〉スタッフもいっしょに話そう。話し方のモデルを作る。

指導員も同じスタンスで話合いに参加する。何をどのように話せばよいのか具体的に理解できるようにするため、スタッフが、児童生徒のモデルとなるようにする。

〈視点エ〉「ありがとうみつけ」を中心にしよう。話した内容については受容的に聞く。

聞き手が受容的であることが、話し手を育てる重要なポイントであることはいうまでもない。そして、話し手も自己受容ができるように「ありがとうみつけ」や「今日の活動の振り返り」に話題を絞り込む。スタッフも児童生徒の行動を認める発言に終始することで、児童生徒に肯定的な内容の発言が自然と身に付くように配慮する。

〈視点オ〉輪になって話そう。みんなで話し、みんなで聞く。

森重祐二氏は「クラス会議で学級は変わる」の中で、「(輪になることを) 普段の教室とは違う特別な場所であることの『象徴』として考えていることと、教師も一つの輪に入ることは、一緒に活動するんだという『態度』を示すこととなる」と述べている。そこで、机などの配置を変え輪になって話すように準備した。また、話し手であることを意識させるために、トーキングスティックを持つようにした。

〈視点カ〉会議の名前をつけよう。自分たちのために話し合う。

話合いは自分たちのものであることを意識付ける。話合いが、身近なものとなるように、会議の名前をみんなで決めることを第1回の話題とした。

② 実践

[前期フレンド学級 スマイル会議の話題とスタッフの観察記録 (抜粋)]

活動日	話合いの話題と話し合いの様子
5月23日	○スマイルタイム 「会議の名前を決めよう」
5月26日	○ミニスマイル会議 「足羽山での遊びを決めよう」
5月30日	(養護学校訪問)
6月6日	(足羽山散策)
6月9日	(ワークフレンド)

(スタッフの活動記録より)

クラス会議のネーミングもとても良い雰囲気の中で「スマイル会議」と決まり、さよならミーティングでもほめた。

昼食後には、ミニスマイル会議で足羽山での遊びの案がたくさん出た。今日から「さよならミーティング」で「ありがとうみつけ」の発表をする。

さよならミーティングでは、少しずつ話ができるようになってきている。

さよならミーティングの感想も自分の言葉で自分の思いを人に伝えることが上手になってきている。

「友だちにありがとう」カードを書き、渡すことができた。感想では、充実感あふれる感想が聞かれた。

6月13日	○スマイル会議 「A幼稚園でするお話のプレゼントを決めよう」
8月25日	(グループエンカウンター) ・前期フレンド活動を振り返り、友だちのよいところやありがとうの気持ちを伝えよう。

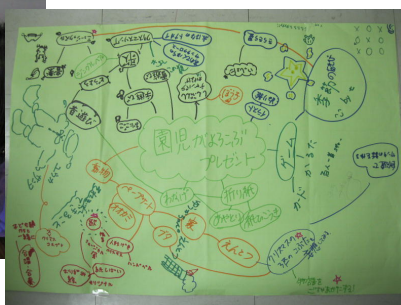
前期最後のグループエンカウンターで、どの子も相手のことを考えて、自分の思っていることを話すことができた。少しずつの時間ではあるが、スマイル会議やさよならミーティングで話す活動を続けたおかげだろう。

[後期フレンド学級 スマイル会議の話題とスタッフの観察記録(抜粋)]

スマイル工房①では、ワールドカフェ方式の話合いを取り入れた。

ワールドカフェの手法による話合いの流れ

1. 2グループに分かれ、「園児が喜ぶプレゼント」について話し合う。
2. 他のグループに行き、アイデアについて意見交流をする。
3. もう一度自分のグループに戻り、自分たちのグループの意見をまとめる。
4. それぞれのグループの代表が、自分たちのグループで出した意見について発表する。



スマイル会議の様子(左・中央 ワールドカフェ方式のスマイル会議 右 さよならミーティング)

ケース3

C児 小6女子。小5のGW明けから不登校になり、その年度の1月から入級。週に何回か放課後登校を続けていた。大きい集団で活動したりみんなの前で話したりするのが苦手。苦手な場面になると、腹痛など体で不応を表現してしまうことがある。

[さよならミーティングでの発言の記録より(抜粋)]

- 6/6 疲れたけど楽しかったです。
- 6/30 成功して良かったです。声がかれました。
- 7/25 スマイルタイムで自分が思っていることと人が思っていることが違っていたのでびっくりしたし、楽しかったです。
- 8/8 足のけがでお騒がせしました。スポ少もできるようになって、全国大会にも行けてよかったです。学校に行けなくてフレンドに来たのはよかったと思っています。
- 10/24 動物が好きで、飼育員とか動物に関わる仕事をしたいと思っていたので、夢に一歩近づいたなあと思いました。

これらの感想の記録からみても、フレンド学級で話す回数が増えるにつれ、言葉の数も増え、内容も自分を見つめたことをみんなの前で素直に話すことができている。

2011年の振り返り（表4）では、どの項目も評価4以上をつけている。フレンド学級という少人数の集団で自分の考えや思いを話すことができるようになり、自信をつけてきたと考えられる。

C児は、現在（12月末）保健室登校を続けながらフレンド学級にも来所している。スポ少活動を楽しみにしている。私立中学受験をし、合格した。中学校へはきちんと登校しようと意欲的である。

④ 活動内容についての考察

現在のフレンド学級在籍者は、安定して通級できる児童生徒なので、短時間の活動であっても継続して行うことで、コミュニケーションの量を増やすことができた。言葉によって自分の考えや思いを表現する場が確保されたことで、安心して話すことができるようになったのであろう。「伝える意欲」を高めるベース作りになったと思われる。

「適切に話すためのスキル」の習得という点では、相手の話を最後まで聞くこと、相手に聞こえるように最後まで話すこと、自分の思っていることを話すこと、相手が不愉快にならないような言葉を選んで話すことができるようになってきている。

また、ワールドカフェ方式による話し合いは、予想以上に話し合いの雰囲気も良く、児童生徒たちは思い思いの意見を述べたり友だちの意見を取り入れたりしていた。園児の立場に立った意見も多かった。

(3) コミュニケーションに困り感をもつ児童生徒への個別支援

体験不足からだけでなく、児童生徒自身の特性から、コミュニケーションに困り感をもつことがある。このような児童生徒に対しては、共感的な支援だけでは、状況が改善されないといわれている。そこで、具体的な体験を通して、まず、自分の考えや気持ちを適切に表現させたい。そのために、個別の支援を工夫する。

ケース4

D児 中3女子。中2の二学期から不登校。相談室での人間関係のトラブルがきっかけと思われる。しかし、学校や保護者からの聞き取り、スタッフの見取りでは、相手にも課題があるかもしれないが、本人自身にも、急な予定変更に対する不安感、非言語的なコミュニケーションの拙さ、過度なおしゃべりや集中が続かないなどの発達上のつまずきと思われる点が見られた。

① 支援例

〈支援1〉共通して使う言葉はカード化して、合い言葉にする。

D児に対して、気持ちが不安定になったときやあらかじめ勝敗がつくような活動のときに、スタッフがカード化した言葉を合い言葉として使用し、気持ちが安定するようにした。

【カード化した言葉の例】

勝ったときは

ばんざーい

負けたときは

ざんねーん

失敗したときは

ドンマイ

《支援の経過》

D児は、ゲームなどで負けたり自分が不利になったりするとあからさまに不機嫌になる。おはようミーティングで、このカード化について説明したため、児童生徒、スタッフともに共通理解ができた。ゲームの時には、D児だけでなく他の子も気軽に使用することができた。そのおかげもあり、D児自身は抵抗なく使うことができるようになった。

ゲーム以外でも、最後までできれば「ばんざーい」、できなくても「ドンマイ」とシミュレーションをしたところ、不安を口にすることが減った。事前に感情表現の方法を知らせておくことで、失敗

してもパニックを起こさずにすんだのである。これらの言葉を聞くことで思考の切り替えができる場面が増え、勝敗があるような活動全般について、徐々に落ち着いて取り組めるようになっていく。

〈支援2〉自分で感情をコントロールできるように、D児のコミュニケーション不全の原因を外在化する。

D児は、感情のコントロールや相手の非言語的なコミュニケーションの読みとりが苦手である。そこで、激しい感情の落ち込みの原因を「〇〇ちゃん」、こだわりの強さを「△△ちゃん」、非言語的コミュニケーションの読みとれなさを「□□なタイプ」というように擬人化や分かりやすいフレーズで外在化して、問題に対する対処法を考えた。

《支援の経過》

D児は、「落ち込む自分」＝「だめな自分」、「空気の読めない自分」＝「嫌われる自分」のように思い込む傾向が強く、行動を変えることが困難であった。しかし、「〇〇ちゃん」が出てこないようにするにはどうしたらよいかと投げかけることにより、自分で対処法を考えやすくなった。行動や言葉を図式化しながら話し合うことにより思考を視覚化した。その結果、失敗したときも「〇〇ちゃん、出ちゃった」と言って、自分を責めることが少なくなってきた。母親も「最近では、冗談も通じるようになってきたんですよ」と、報告してくれている。

〈支援3〉保護者支援で、D児の心の安定を助ける。

個別支援を行ったら、保護者にその内容をできるだけ具体的に伝え、支援の共通理解を図る。さらに母親が安定することでD児自身の心も安定するように保護者支援をする。

《支援の経過》

来所当初、保護者は、周囲の子によるいじめや学校の対応への不満を強く訴えていた。しかし、学校からの聞き取りやスタッフの見立てとの食い違いもあった。そこで、まず、本人ができたこと、がんばったことなどプラスのことを多く伝えた。そして、できないことは、「このような支援をしている」と具体的に伝えた。また、学校で行われるケース会議には、保護者をサポートするために同席するようにした。その結果、保護者は、D児の困り感を理解し、どうすればフレンド学級のような安心できる環境を維持していけるかに、目を向けることができるようになってきた。現在は、フレンド学級や学校以外の関係機関とも連携し、本人がより良い環境で過ごせるように積極的に働きかけ、D児自身も素直にその支援を受け入れている。

D児は、フレンド学級の中では、以前に比べて、パニックを起こすことは減ってきた。まだ学校へは登校できないが、テストを受けたり高校受験に向けて学習を進めたりしている。保護者の話によると、同年代の子どもたちとの接触を嫌がり一人では買い物にも行かなかったが、最近ではかなり落ち着き、一人で買い物にも出られるということだ。

② 実践内容についての考察

D児は、当初、本人のもつ特性からの困り感というより、いじめられたという感情が非常に強い状態であった。したがって、このような支援をするまでに、気持ちの安定を図ることや担当スタッフと信頼関係をもつことに時間がかかった。いったん、フレンド学級が安心・安全な場であることが本人に納得できると、支援を受け入れることへの抵抗はほとんどなくなった。そして、場を捉えて支援すれば取りあえず理解できるようになった。D児が支援を受け入れられるようになるにつれ、フレンド学級での人間関係も少しずつ良くなってきた。しかし、そのスキルを身に付け、周囲の人との関わりを広がっていけるといふところまでには至っていない状態である。

V 研究の成果と課題

1 実践の成果

新たな集団へ適応していく力は、自己肯定感の高まりの上に、相手を意識した「適切な自己表現」の力を付けていくことで伸びていくものであると考え、フレンド学級において実践を行ってきた。結果をまとめてみたい。

幼稚園訪問の中に、ペープサート劇やハンドベル演奏などの表現活動を意図的に仕組んでいくことで、フレンド学級児童生徒に達成感を味わわせたりチャレンジする意欲を高めさせたりすることができた。また、保育活動を補助したり共に活動したりすることで、フレンド学級児童生徒は、園児たちから賞賛され、認められるという体験をすることができた。このことは、彼らに、自分が周りに対して働きかけることで前向きに自分の可能性を広げていけるという自信を回復させる力にもなったと思われる。このような自己に関する肯定的な感情を高めることができた結果、フレンド学級児童生徒相互にも、コミュニケーションの場が広がったと捉えることができるだろう。

スマイル会議は、「クラス会議」の進め方を基本に取り組んだ。輪になって座ることや「ありがとうみつけ」（進んで話し合ったり、協力し合ったりするための雰囲気作り）の過程が、話す活動の「枠」となり、オフィシャルな場での話し方や受容的に話したり聞いたりするスキルの習得につながったのではないと思われる。一方、ワールドカフェの手法による話し合いは、リラックスした場で多様な意見にふれ、話し合いそのものに価値を見出すことができるものである。したがって、話し合う中で、互いの違いを認め合うことが可能となった。フレンド学級の異学年少人数集団としての良さを生かして、心地よい話し合いの場をもつことができたと思われる。これらのことから、今回の取組みでは、コミュニケーションの量を確保するというねらいが達成された。

コミュニケーションに困り感をもつ児童生徒への個別支援は、支援者と本人との間に信頼関係が成り立っていれば、効果を上げていくことが分かった。個の特性に合わせた支援の方法は、いろいろ試すうちに本人にぴったり合うものが必ず見つかるものである。しかし、学校に不適応を起こしている児童生徒の場合、本人の心の傷を癒すこと、保護者に安心感をもたせること、周りの児童生徒に受容的態度を育てること、そして、その場に合わせたスキルを身に付けさせることは、多少根気のいる取組みである。担当スタッフ一人の責任にならないようにフレンド学級スタッフがチームで取り組んだことが支援の効果を上げたと考えられる。

以上の実践の結果から、自分の気持ちを「伝える意欲」と相手に「適切に伝えるスキル」を育む異学年少人数集団の特徴を生かした活動プログラムの有効性が確かめられた。この適切な自己表現の力が伸びることにより自己肯定感がさらに高まり、適切な自己表現に自信をもつようになることも期待される。また、相手から他者へ自己表現の場を広げていくことも可能であろう。この実践を継続していくことが重要である。

ところで、今年度、フレンド学級で取り組んだ実践内容は、学校においては決して珍しくない実践である。これは、すなわち、次のように捉えることができるだろう。適応指導教室に通う児童生徒が学校に復帰するためには、まず、共感的な関わりの中で、より学校的でない体験を重ね、自己肯定感の回復を図ることが必要となる。そして、次の段階では、慎重に学校的な体験を再開し、個と個のつながり方を学び直すことへと移行させてゆく。つまり、適切な自己表現を繰り返し、自信を取り戻す中で、集団に適応する力を身に付けることの必要性を裏付けるものである。適切な自己表現に焦点をあてた活動は、教室でも生かせるのではないだろうか。適応指導教室では学校復帰を目的としているが、教室では不登校傾向にある児童生徒を含めた学級全員の不登校に対する予防的・開発的対応を目的として取り組むのである。教室という共感的関わりのある場での、適切な自己表現の積み重ねが自己肯定感を高めていくことを可能にするのではないか。

2 これからの課題

これからのフレンド学級の取組みとしては、いくつかの課題が残る。主なものの一つは、スマイル会議の取組みである。今年度の取組みでは、コミュニケーションの質を高めていくことは十分ではなかったと思われる。本来、クラス会議は、集団の中での合意形成を図るための話し合いである。しかし、フレンド学級児童生徒にとっては、あまり必要感のある話し合いではなかった。むしろ、フレンド学級児童生徒に必要とされる「話す体験の場」は、さよならミーティングで行っているような受容的かつ継続性のある話す場の確保とワールドカフェの手法による合意形成を図らない話し合いの場を適宜組み合わせるものではないかと考える。まず、話すことや話し合うこと、つまり、自己表現をすることは心地良いものだと感じる事が大切だと思うからである。また、今年度は、フレンド学級在籍者が固定的であったが、流動的な場合は、違った視点からの工夫が必要になるだろう。

「共感的・異学年・少人数」集団での「個と保護者に寄り添う」支援という適応指導教室の良さを生かして、不登校児童生徒が集団に適応する力を伸ばしてきた。今後は、適応指導教室と学校との間で、人・物・情報等の気軽な行き来を通して、学校のプログラムではこの力が付きにくい児童生徒を支えていく方法をさらに検討していきたい。学校からの要望に沿った適応指導教室の在り方の再検討がまず必要だと考える。

《引用文献》

- 森重祐二(2010)『クラス会議で学校は変わる!』明治図書、p28

《参考文献》

- 赤坂真二(2010)『先生のためのアドラー心理学 勇気づけの学級作り』ほんの森出版
- 五十嵐悦子(2008)「不登校児童生徒の理解と支援の在り方についての研究—適応指導教室での体験活動の充実と評価—」『研究紀要』114号、福井県教育研究所
- 榎本博明(2010)「子どもの『自己肯定感』のもつ意味」『児童心理 3月号 No.910』金子書房
- 遠藤由美(2010)「自己肯定感の構造」『児童心理 3月号 No.910』金子書房
- 大西正明(2010)「不登校生徒の進路選択およびそれにかかわる—学習支援に関する研究—」『研究紀要』116号、福井県教育研究所
- 強力香苗(2010)「不登校児童生徒の集団適応に向けての支援の在り方—自己肯定感を高めるための活動の工夫—」『研究紀要』116号、福井県教育研究所
- 沢崎達夫(2010)「自己受容(グッドイナフ)は向上心を弱めるか」『児童心理 3月号 No.910』金子書房
- 高垣忠一郎(2009)「私の心理臨床実践と『自己肯定感』」『立命館産業社会論集 第45巻 第1号』
- 高垣忠一郎(2010)「『評価』ではなく『赦し』の自己肯定感」『児童心理 3月号 No.910』金子書房
- 松尾直博(2010)「直接体験の中で育つ自己効力感」『児童心理 11月号 No.922』金子書房
- 高山恵子・松久真実・米田和子(2009)『あったかクラスづくり』明治図書
- 山口芳江(2009)「不登校児童生徒の学校復帰に向けた援助に関する研究—適応指導教室の取組みを通して—」『研究紀要』115号、福井県教育研究所